

| | | | |
|------|----|---|---|
| 報告番号 | ※甲 | 第 | 号 |
|------|----|---|---|

主論文の要旨

論文題目 ケアにおける尊厳の概念統合：施設で暮らす高齢者のインタビューと文献レビューより
氏名 長谷川奈々子

論文内容の要旨

はじめに

高齢者施設入居者の尊厳を守り、尊厳あるケアを提供することは簡単なことではない。看護における尊厳の初期の定義として、Shotton ら（1998）は「ある人が、その能力を十分発揮できる状況にあるときに、尊厳をもつ」と述べた。また、Jacelon ら（2004）は尊厳には自己に帰属する尊厳と、個人及び他者の行動に関わる行動的尊厳があることを同定した。尊厳には多面的な側面があり、尊厳あるケアを提供する場合にどの部分に注目するかによって、実践への考え方が変わってくると考えられる。また、ケア提供者は十分な環境がない中で尊厳あるケアを提供するためには日々大きな苦勞を伴うものであり、尊厳を損なうようなケアしかできないときは職員自身の尊厳や健康も脅かされる。入居者だけでなく職員を守るためにも、できる限り尊厳を文脈化・可視化し、尊厳が損なわれている状況に職員が気付けるようなシステムを構築することが必要である。

現在、複数の側面からの解明が取り組まれているものの、尊厳はまだ「実践に対して実際的な影響を与えていない領域」に近いといえる。こうした現象に対して Walker ら（2010）は、それらについての情報を分類し、規則正しく配列する、新しい方法を開発する必要性を述べており、それを概念統合として推奨している。

今回は、私たちは高齢者施設入居者に対し、尊厳に関する施設での彼らの経験について理解するためにインタビューを行い、また実践の観点から高齢者施設ケアにおける尊厳についての重要な情報を集約するために文献レビューを併せて行うこととした。本研究の目的は、尊厳あるケアを看護実践に近づけるために、高齢者施設入居者へのインタビューと文献レビューによる概念統合アプローチを用いて、高齢者ケア施設における尊厳の概念を特徴づけることである。

方法

本研究の概念統合は、解釈学的現象学を用いたインタビュー調査とマトリックス方式

による文献レビューの両方の視点に基づく。インタビュー調査は、日本の7施設に入居する12名が合目的抽出法で集められ、計27回のインタビューが行われた。インタビューはICレコーダーに録音し、録音データを逐語録に起こし、分析は解釈学的現象学アプローチに沿って行った。テーマ生成の段階においては、「専門家による審査」の手順を踏んだ。テーマやサブテーマ、コード、分析プロセスを提示し、専門家らが違和感を抱いた部分に関しては、逐語録や音声データまで戻り、本来の解釈について再検討した。

文献レビューはPubMed、CINAHL、Web of Scienceを用い、Dignity、Elderly、Nursing homeといった用語を組み合わせて検索した。文献の選択の過程では2名の研究者で、あらかじめ規定された選択基準に基づいて選択し、合意に至るまで協議した。選定された文献の適格性の基準として、質の研究はCOREQ32項目、量の研究についてはCONSORT2010の一部（ランダム化のための手順などの当てはまらない12項目を除いた25項目）を用いて評価した。また、選定された文献の参考文献もリストアップし、同様の基準で評価し、レビューに追加した。レビューの内容は、EXCELを用いてマトリックス方式でまとめた。

概念統合は、インタビューと文献レビューを同時期に開始した。インタビューの結果が先に要約され、ケアにおける尊厳の概念の枠組みを暫定的に確立した。次に、概念の信憑性を高めるために文献レビューの結果を照らし合わせるよう進めた。具体的な作業として、レビューで選ばれた文献の中に示されていた尊厳に関する内容をコードとして抽出し、類似性に基づいて整理した。インタビューの結果とレビューの結果の相違や類似性にも注目しながら、テーマやサブテーマ、グループの最も適した名称を決定した。こうして、概念統合による高齢者施設ケアにおける尊厳の概念を特徴付ける概念マトリックスを完成させた。

本研究は名古屋大学大学院医学系研究科生命倫理委員会にて承認を受け実施した。

結果

インタビューのデータコード数は1,728であった。それらから4つのテーマが生成された：**【他者におかされることのない個人の尊厳】**、**【提供されるケアにおける尊厳】**、**【家族、友人や入居前からの社会との関係における尊厳】**、**【介護施設・介護制度による尊厳】**。

文献レビューでは3,716件の文献が検索され、28件の論文が選定された。この28文献を対象者別（入居者、スタッフ、家族、その他または複数対象者）にマトリックス方式を用いてまとめた。選択された論文の科学的な質の評価結果についてはマトリックスの列トピックと共に示した。

これらの結果を照合し**【他者におかされることのない個人の尊厳】**、**【(狭義)の尊厳あるケア】**、**【職員側の要素】**、**【家族・友人・社会・他の入居者との関係における尊厳】**、**【介護施設・介護制度による尊厳】**という5つのテーマと相互の関係性を示す概念マトリックスが得られた。

考察

提示された概念と概念マトリックスは、個人が主観的に感じるものであると同時に、他者との相互関係にも強く影響されるという尊厳の特徴と、尊厳あるケアを臨床実践に根付かせるため役割を明確化するという本研究のねらいを反映している。また、本研究は入居者と職員、そしてそれらから広がる社会や介護制度の枠組みを示し、その中にケアにおける尊厳の要素を示すことができた。これはGallagherらが述べる、ケアにおける尊厳は「個人、組織、そしてもしかしたら社会や政治的に複雑に混合した要素からきているかもしれ

ない。」という仮説を支持する一つの解であると考える。

今後の看護にもたらす貢献として、本研究が提示した概念の特徴や概念マトリックスはスタッフ、チーム、組織、そして介護システムの役割を明確に示す指標となると考える。現在までに報告されている尊厳の定義の多くが1対1のケアを想定したものであり^{9,19,22}、ともすると、現場の1職員に尊厳あるケアの責任が押し付けられてきたともいえる。そのため、入居者に尊厳あるケアができないとき、職員個人が思い悩むこともあったと考えられる。本研究において、ケアにおける尊厳を法や施設理念に示す取り組みが、個々の職員が尊厳あるケアを行う実践的な努力と十分に結びついていないことが示された。今後はチーム、施設レベルでの尊厳あるケアのさらなる探求が望まれ、そのような視点で新しい制度やルールを定めていく必要があると考える。

結論

今回の研究結果からは、高齢者施設の入居者個人に関わる尊厳や日常ケアにおける尊厳だけでなく、制度や組織、家族や社会の役割を含めたケアにおける尊厳の概念を特徴付けた。本研究の新規性は尊厳の概念を特徴付け、尊厳の要素を示しただけでなく、2次元の概念マトリックスを提供したことにある。